

Title	三田哲學會記事
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	1939
Jtitle	哲學 No.20 (1939. 4) ,p.221- 224
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000020-0221">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000020-0221</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 三田哲學會記事

○昭和十三年五月二十五日(水)午後三時半於滿鐵ビル内「アジア」例會及新入會員觀迎晚餐會開催。

歴史の一方面の考察……………船田三郎君

歴史の學ではなく、歴史そのものを問題とするのであるが、先づ序論として二つの歴史の見方、普遍主義と個別主義とを論述せられ、次に本論に入り、先づ歴史的現實の時間上の性格として單なる變化と異つて、過去が現在を規定し、亦未來が現在を規定するものであることを述べ、更に空間上の性格として、それが單に個人ではなく、國民社會であること、しかも單なる國民社會ではなく、自己の個性を把握しつゝ、他の文化を攝取し、人類性を理念として豫想する *Menschheitsvolk* たるべきことを論述せられた。

○昭和十三年六月二十九日(水)午後三時半於交詢社例會開催。

教育上の權威の問題……………田中吟龍君

従來教育に於ける權威の問題の前提として權力、強制と個性、自由とを對立せしめたが、こう云ふ對立の前提が誤りであつて、教育活動と云ふ *Fakt* に於ては教育者の權威と被教育者の自己活動とは融合して居るのである。斯くて従順の概念を心理教育學的立場より検討し、道德的社會的秩序の意識が人間に本性的である以上、教育に於ける權威は必須のものであり、非本質の強制ではありえず、従つて個性並びに自發活動を阻害する所か、反つてこれらの根柢に於て要請せられるものなることを結論せられた。

○昭和十三年九月二十八日(水)午後三時半於交詢社例會開催。

全體性の理論……………川合貞一君

現代に於ける種々の科學の分野に於て全體性の強調が唱へられて居るが、特に人間の集團生活との關係に於て論述を進められ、アリストテレスのツォーオン、ポリテイコン、ルツソーのヴォロンテ、ヂェネラルにこの理念の萌芽あるを指摘せられた。この思潮には「全體」を何と見るかに従つて觀念論的方向と實在論的方向とがあり、前者に關してはカント、フイヒテ、シエリング、ヘーゲル、ロマンティックを通じてシュパンの所説を、後者に關しては、コムト、デュルケム、ソリダリズム、ドリーシュ、ローゼンベルグの所説を論述せられた。

○昭和十三年十月二十七日(木)午後四時、於交詢社例會開催。

日滿支の國民教育……………小林澄兄君

單に普通教育のみならず、廣義の國民教育に關して考察を進め、日滿支の教育制度の現状を各個別に説述評價せられ、將來の方針として日滿支提携の理念的根據の確立の急務を説かれ、その試みの若干を紹介せられた。又實際方策として本邦に於ける對支教育の重要性及びその検討、文化交流の内容の如何なるものなるやに就て説明せられた。

○昭和十三年十一月十六日(水)午後一時於本塾三十三番教室公開講演會開催。

意識の相對性に就て……………横山松三郎君

一定刺戟に對應する反應は單純な絶對的結合物ではなく、刺戟は常に何らかの場の中に於てのみ與へ

られてゐるものであり、従つて同一刺戟もその場如何に依つて異なる反應を有する點で相對的であり、結局、場の構造と反應の相對性を問題とせねばならないと説かれ、更にこの場が單に該刺戟とそれに伴ふ他の諸條件即ち、諸刺戟との集合に非ず、一定の形態構造を有するものなることを論述された。

全體主義の理論……………川合貞一君

個體主義と全體主義とはもと社會思想に限定されぬが、特に社會思想としてこれを見る時、それらは常に基礎としての社會構造を反映せるものなること、又ホツプスや空想社會主義者等の國家理論、ヘルバルト、ベルゲマン等の教育理論に於ける變遷を手掛りとして全體主義思想の出現を説かれた。更に觀念論的全體主義を論述せられ、その論理的優位即價值優位の立場を批判せられ、更に實在論的全體主義を論述せられ「全體」としての實在を人種又は「血」に置く一面的立場より、寧ろ、歴史的關係に依り心理的に形成された全體たる民族を「全體」と評價する立場を主張せられた。

○昭和十四年一月二十一日(土)午後二時半於交詢社例會開催。

書の一考察……………守屋謙二君

書は造形美術なりやの問題を扱はれた。東洋繪畫に於ける線的表現の重要性と書との關係に注目し、支那に於ける書論に言及さる。造形美術品に於てのみ可能な時間を超越した視覺的作品の世界に於ては、東洋美術も西洋美術も世界藝術として比較考量せられるが故に、周代銅器の銘文とギリシヤ彫刻等の銘文とを比較すると前者に於ける書的表現の重要性と後者に於けるそれとは到底比較にならぬこと、後者では單に表音のみであるのに、前者に表音の他、寧ろ表形を主として居り、しかも他の表形の中心をな

して居ることを例證せらる。斯くて視覺的世界藝術界に於ては西洋の丸彫と東洋の書畫的表現とは *sculpture* の意味で極性をなして居り、換言すれば、西洋美術は丸彫に依つて、東洋美術は書畫的表現によつて特性付けられると結論せられた。

○昭和十四年二月八日(水)午後五時於第一ホテル本年度卒業生諸君論文發表並送別晚餐會開催。

當日發表せられし論文左の如し。

- 「主體的精神と個體の主體性の論理」……………佐々木俊次君
- 「徳川時代の教育概観」……………永坂 涉君
- 「『新女大學』評論」……………荒尾 達 雄君
- 「知覺過程に於ける露出時間の機能」……………田中 甚右衛門君
- 「色彩の感情價值及び配色の空間的構造」……………北島 清 造君
- 「簡單反應時間と『前期時間』との關係に就て」……………五味淵 均君
- 「社會學的憲法觀」……………河合 慎 吾君